

# 『源氏物語』のトルコ語訳について

ERKIN H. Can

## はじめに

この講演では2008年に出版を予定している『源氏物語』トルコ語訳のトルコ文学界における位置付けについて述べたい。まず、トルコでは日本やその歴史・文化要素がトルコ文学においてどのようにテーマとして使われたかに触れ、そして日本文学作品のトルコ語に翻訳される状況を紹介し、その流れのなかで『源氏物語』トルコ語訳の意味について考えたい。

## 1. トルコ文学における日本をテーマにした作品

トルコ文学において日本が初めてテーマとして現れてくるのはメフメット・アーキフ・エルソイ (Mehmet Akif Ersoy) の『サファハット』においてである。エルソイは1923年に建国されたトルコ共和国の国歌「イステイクラル・マルシュ」の歌詞を書いた詩人でもあり、1911年に書いた『サファハット』の一部はタイトルを「ジャボンヤ」と付けた詩に分けている。『サファハット』は全体的にオスマン朝の衰退を批判する詩歌選ではあるが、その内容と対照的に「ジャボンヤ」の部において日本を褒めている。『サファハット』は当時のオスマン知識人の間では好評の作品であり、エルソイのこの名著はトルコにおける日本への関心の向上にも繋がったのではないかと思われる。

トルコ共和国時代になってから、トルコ文学界と日本を関連付けるような展開は1940～50年代のトルコ現代詩が最盛期に達していた時期である。その時期を代表する詩人オルハン・ヴェリ・カヌク (Orhan Veli Kanik) が日本の俳句

に非常に似ているような詩を次々と書いたことは顕著である。カヌクは日本の俳句をどの程度意識していたかは明らかではないが、トルコ語に翻訳された日本文学の中で最も早い例の一つは1962年に刊行された『日本詩歌選 (Japan Siiri)』である。この本は英語に翻訳された詩歌選集をもとにトルコ語翻訳がなされたものではあるが、当時のトルコ文学界において主導的に活躍していたヴァルルク (Varlik) 出版社の世界文学シリーズの1点として出されており、当時の詩歌ブームのなかで注目を浴びている。トルコにおける俳句に対する関心もほぼ時期を同じくして生まれており、現在はトルコ語で俳句を作っている詩人も数多くいて、トルコ俳句会なども開かれている。

1960年代のトルコ文学界において日本と繋がりを持つような動きは「原爆文学」への関心の高上である。日本や世界各国の原爆悲劇に関して書かれている文学作品がトルコ語に翻訳される傍ら、トルコ人による「原爆文学」も見られている。その中で最も有名なのは世界でもその名を知られる詩人ナズム・ヒクメット (Nazim Hikmet) の詩「(広島) 女の子」であることは言うまでもない。「女の子」はその後歌詞としても使われ、一般のトルコ人にまで楽しまれた詩である。おそらく、トルコでは日本をテーマにしたトルコ人による文学作品のなかで最も広く知られているものである。

トルコで日本を舞台にした文学作品の中では顕著な作品としてアティラ・イルハン (Atilla İlhan) の小説『ヤラヤ・トゥズ・バスマク (傷口に塩を付ける)』もあります。1978年に出版されたこの小説は朝鮮戦争に参戦したトルコ部隊の少尉の物語である。朝鮮戦争で負傷し、日本で治療を受け、その後トルコに帰国し、1960年のクーデタに力を貸す少尉ではあるが、トルコは朝鮮戦争で負傷して日本で治療を受けた兵士は数多く、さらに小説が出版された2年後にトルコではまたクーデタが起きたこともあり、非常に人気の対象となった作品である。

近年になってからは、日本に滞在したトルコ人たちの旅行日記のような作品も出ているが、広範な人気を得た作品は余り現れないような状況である。

## 2. トルコ語に翻訳された日本文学—二次翻訳の場合—

トルコ人の作品以外は日本人作家の作品がトルコ語に翻訳される様になったのは1960年前後からのことである。以上述べた日本詩や原爆文学以外はトルコにおける日本文学翻訳は2つのブーム期がある。それは1968年川端康成がノーベル賞を取った後の4、5年間と、1994年に大江健三郎がノーベル賞を取った後の2、3年間である。1968年から1973年の間川端康成とともに三島由紀夫、谷崎潤一郎のような世界でも有名な日本人作家の作品が次々とトルコ語翻訳、出版されたのである。その後も1年の一つという感覚で日本の文学作品がトルコ語に翻訳され、以前翻訳された作品が重訳の形で再度翻訳、出版されながら1990年代に至ったのである。1990年代にはトルコ語に翻訳された日本文学を考える場合、2つの注目すべき点がある。その一つはいうまでもなく大江健三郎がノーベル賞受賞して後、顕著な作品がすばやくトルコ語に翻訳されたことである。もう一つは、トルコの出版界でも有力な出版社ジャン(Can)出版が三島由紀夫の傑作『豊饒の海』を1992年から1994にかけて4冊ともに出版したことである。さらに、安部公房『箱男』、よしもとばなな『キッチン』も時期を同じくしてトルコ語翻訳され、出版された。

しかし、これらは全部他の言語を介してトルコ語に翻訳されている。つまり、日本語から英語、フランス語またはドイツ語に翻訳された作品が、その翻訳本がもとにトルコ語翻訳されている。このような翻訳の仕方は当然様々な問題を含んでいる。

まず、作品は西欧の言語に翻訳される場合、その作品において主張されているメッセージやそのなかに見られる社会や文化的要素はその西欧の言葉を利用する社会の日本に対する認識や固定化された概念が利用されながら翻訳が行われるであろう。西欧における日本研究は19世紀にはすでに成立しており、トルコの場合は20世紀末になってやっと始まった状態である。それほど沢山の成果をあげているとも言えない。一般にはトルコ人は日本に対して無知といっても過言ではない。そのため、日本語が分からない西欧語の翻訳者は参考にできる

トルコ語の参考文献などはないに等しい。日本文化や社会の事情を殆ど分らないような者が翻訳した作品には当然、様々な問題点が生じてしまう。

もちろん、文化・社会的基盤を異にする日本語から西欧の言語への翻訳において、様々な要素がその言語を利用する読者の感覚に適応できる語彙選択がなされることは言うまでもない。しかし、その西欧語翻訳文がさらに異質なトルコ語に翻訳される場合、原文から遠ざかって行くことは当然の結果である。そもそも、西欧語から翻訳をする翻訳者はその言語の感覚で翻訳し、結局は様々な日本独特の文化要素や独自の概念を西欧文化にフィルターされた形でしか捉えられない。特別、日本文化に興味を持つ翻訳者であれば、この問題が軽くなるかもしれないが、トルコの場合はそのような翻訳者は殆どいない。

一方、大まかに言えば日本語の語順だけをとってみても、西欧の各言語と違うことは周知の通りである。しかし、トルコ語と日本語を取ってみるとその語順や文法構造は非常に近い。この点でも、二次翻訳は問題をかかえている。要するに、日本語から語順・文法特徴の異なる西欧の言語に翻訳され、そしてその翻訳がまた西欧のその言語と語順や文法特徴が異なるトルコ語に翻訳されることになる。当然、この過程においても様々な意味の変化や原文の文芸的な特徴が失われてしまう可能性は非常に高い。

一般的にいつてしまえば、このような形で日本語から第二言語そしてその言語からトルコ語に翻訳された日本文学の作品にはもともとの意味普遍を離れてしまうケースが良く見られるのは現状である。

しかし、これらの作品に使われるトルコ語そのものに関して批判できる余地は少ない。なぜならば、以上に述べた川端、三島や谷崎の作品を二次翻訳の方法でトルコ語に翻訳した翻訳者のなかにはニハル・イエインオバル (Nihal Yeginobali) やアズラ・エルハット (Azra Erhat) やアフメット・アルタン (Ahmet Altan) のような翻訳者であるとともに現代トルコ文学の有名な作家が見られる。そのため、翻訳されたトルコ語文は読者に違和感をもたらす点が少ないにしろ、意味上原文から離れている箇所は数多く残されている。この点が

ら考えると、これらの翻訳者が日本文学を翻訳することによって、作家として何らかの形で日本文学の影響を受けたかも知れない。大枠、現代トルコ文学における日本文学の影響といえるような研究タイトルも考えられなくはないが、その追求は今後の課題とされたい。

それでは、このような二次翻訳は具体的にどのような問題を背負っているか、一つの例をとって見よう。

日本の古典でトルコ語に翻訳された作品としては『葉隠』が二次翻訳本が出版され、さらに直接翻訳本も出版されている。二次翻訳においては英語翻訳本を元にトルコ語翻訳がなされている。このトルコ翻訳のなかで名義や官位などを見ただけでもさまざまな疑問を抱いてしまう。トルコ語翻訳本のなかで頻繁に英語の「Lord」という単語が使われていることが目立つ。翻訳者が読者は誰でも「Lord」を知っていることに確信を持っていた様で、英語のままにトルコ語でも使っている。「Lord カツシゲ」、「Lord イエヤス」など。しかし、この単語はトルコ語にはないもので、それに相当する単語も存在しない。英語の方でもその同じ単語がさまざまな意味で使われるようである。英語のこの「Lord」という単語は英語での利用を見ると使いようによって異なる地位や意味で使われる。しかし、トルコの読者がトルコ語のテキストでこの単語をみると、殆ど思い浮かぶのはイギリスの貴族階級の「Lord」である。そのため、想像する人間関係も同等のものになってしまう。この点に関して、『葉隠』原本を見ると「Lord」として統一されて翻訳された単語は「殿」「様」「君」などで、異なっている。これは、ある意味では当時の武士社会の構造をも現すとも言えるが、それは一つの単語で統一されてしまうと、恐らく読むものは当時の日本社会において皆が「Lord」だったかのような印象を受けるかもしれない。しかし、トルコ語には英語の単語を借りなくても、原本に見られるそれぞれの名義や官位を区別できる単語は十分にある。「殿」は「efendi = エフェンディ」、「様」は「bey = ベイ」、「君」は「kucuk bey = キュチュク・ベイ」、「先生」は「ustat = ウィスタット」、「親方」は「usta = ウスタ」等はその例である。

もちろん、ここでは英語からトルコ語に翻訳した人というより、日本語から英語に翻訳した人の方にも責任があるのではないかと思われる。とくに、地名を見ると、日本の歴史地名辞典などにも見られないような地名が見られる。恐らく、英語の翻訳者は日本語特有の音読み、訓読み、または独特な読み方のある地名というわなに落ちてしまい、トルコ語翻訳者もそのまま翻訳している。

なお、翻訳するに当たって、難問となるもう一つのことは空間の描写である。この点においても二次翻訳『葉隠』は門・屋根・庭という形で建築要素を一つの単語に統一する方法をとっている。これらもまた、原本ではそれぞれ異なった建築要素を示す異なった単語が使われている。

そもそも、日本語からトルコ語へ直接翻訳できる人材がほとんどいないので、このような問題はこれからも生じてしまうかもしれない。

### 3. 文学に関して日本語・トルコ語直接翻訳の可能性とその環境

そもそも、トルコにおける文学翻訳の状況を見ると、英・仏・独は中心的な位置を示しており、イタリア語やスペイン語からの直接翻訳も非常に少ない。ロシア語の場合でも、文学作品の直接翻訳がすぐ最近現れるようになってきている。一方、日本語の場合は、トルコにおける日本語教育や日本研究は新しく、文学翻訳や日本研究ができるほど日本語を使いこなせている者の数は限られている。その殆ども研究機関やその他の職業に付いており、あまり翻訳ができる時間が無い様である。

トルコにおける日本語教育は1980年代に始まり、アンカラ大学において1985年に設立された日本語日本文学科はトルコにおいて初めての独立した日本研究機関となった。その点から考えるとトルコにおける日本研究の歴史は20年ぐらいいで、非常に新しい。その後、エルジエス（カイセリ）大学に日本語日本文学科、オンセキズマルト（チャナッカレ）大学に日本語教育学科が設立され、さらに多数の大学に学生が選択科目で学習できるよう日本語講座が設立されている。しかし、翻訳はともかく、日本語学習のための基本的な材料、教科書や辞

典などがまだ作られてはいない。さらに、翻訳作業の際、参考に成り得る材料も非常に乏しい。日本語翻訳に関する授業は日本語専攻課程のある大学においても他の科目に比べて非常に少ない。そのため、日本語から翻訳をしたい者は、翻訳技術や理論上の知識などは自分で身につけ、翻訳に使う辞書さえ自分で作らなければならない。そもそも、翻訳できる者は翻訳をする両言語に精通する者でなければならない。そのような人材が非常に少ないため、トルコでは日本語から直接翻訳され、出版された文学作品もすくない。それでも、2000年代に入ってから日本語から直接翻訳された文学作品は出版されるようになっていく。

トルコにおける日本文学に関するもうひとつの問題は、トルコの読者の日本文学への関心の低さである。海外文学として欧米やラテン・アメリカの文学はよく読まれているが、日本のように東アジアの文学はあまり読まれない。そこには紹介のなさ、という問題もあろうが、最近トルコの読者の日本文学への関心が高まってきている。それに関連していることとして、トルコ語に翻訳された日本古典文学に触れる必要がある。

日本の古典からトルコ語に翻訳された作品も少ない。井原西鶴の『好色五人女』や『好色一代男』もトルコ語に翻訳されているが、両方とも二次翻訳である。トルコ語に翻訳され、トルコの読者の注目を引くことが出来た日本の古典として『枕草子』がある。その翻訳の方法や宣伝の仕方も影響し、トルコ語に翻訳されたことが広く知れ渡ったといえる。まず、その翻訳方法だが、おそらく世界でも類が見られない方法で、83名の翻訳者の共託としてトルコ語翻訳が完成された。当初、同じ日に同所に集まり、翻訳者達はそれぞれ自分の専門の言語の翻訳本を元に適切な量を分けて一日中に翻訳を完成させる方法が考えられたが、翻訳者がそれぞれ住んでいる都市が違うという地理的な条件によって集まりにくいと判断され別の方法がとられた。それは、インターネット上フォーラムが設置され、毎日翻訳者全員から翻訳しにくい箇所についての質問と解決案の提供が繰り返され、元訳が3ヶ月で完成された。83名のなかに英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・スペイン語・イタリア語・日本語の翻訳者がいた

ので様々な言語からの情報が蓄積され、最終的に日本語・トルコ語の両言語に精通する研究者によって原文と出来上がったトルコ語訳の照合がなされた。その後、文学専門の編集者によって最終文がチェックされ2006年6月に出版に至った。出版社はトルコの大手出版社のメティス（Metis）社であった。

この翻訳に参加した翻訳者たちのなかに作家や出版会関係の者が多く、そもそもこの企画はトルコの翻訳者の協会を設立するための第一歩でもあったので、メディアによって注目され、テレビや新聞や雑誌など、頻繁にニュースになった。作業自体が珍しいということもあったが、翻訳されたのは日本の古典であり、様々な形でメディアの話題になったことでトルコの読者に対して日本文学の宣伝にもつながったといえる。『枕草子』出版前後に出版されたその他の日本文学直接翻訳の作品も新聞や雑誌などに取り上げられたことはその現れである。

#### おわりに：『源氏物語』トルコ語翻訳の意義

ここまではトルコ文学界において日本やその文化要素がどのような形でテーマとして使われ、日本文学のどのような作品がどのような流れのなかでトルコ語に翻訳されたかについて述べてきた。2008年の出版を予定とされている『源氏物語』トルコ語翻訳もその流れの延長線において大きな転回点になるのではないかと思われる。

なによりも、『源氏物語』千年とされている2008年に翻訳本が一つ多くなるということだけでも意味があるといえよう。しかし、日本とトルコのつながりを特定して考える上でも『源氏物語』トルコ語訳が意義を持つであろう。日本文化の心底をなす時期の一つでもあった平安時代の優れた作品を現代のトルコに紹介することは、千年前の日本から現代トルコへ文化的な特徴のある橋を架けることにもなるであろう。その上では、平安時代日本特有の空間、生活観、人間関係、社会構造、信仰などの紹介にもなり得る。それと共に、トルコ文学界におけるいくつかの定義の再検討にも繋がるであろう。一つの例を言えば、トルコ文学界では小説と言われると、セルヴァンテスの『ドン・キホーテ』が世界初の小説である



という認識が強い。しかし、様々な面では『源氏物語』が小説的な特徴をもっており、その意味では『ドン・キホーテ』より何百年も前に世界文学のなかでは小説が存在していたことを紹介する結果をもたらすであろう。一方、トルコにおける俳句をはじめ日本の詩文学への関心の高さを考えると、『源氏物語』翻訳はそのなかにある短歌の数からみて、非常に良い参考材料を提供することになる。

トルコでは世界の古典文学、主に西欧の古典文学がすでに多数翻訳され、知られているが、東アジアの古典に関して殆ど何も知られていないといえよう。その点から見て、『源氏物語』トルコ語訳は西欧の古典文学に劣らない作品が日本に存在することを十分にアピールできるであろう。

最後に、以上述べてきたトルコにおける日本文学の紹介という観点から、抜け落ちていた翻訳作品もあるかもしれないが、直接翻訳・二次翻訳に分けてリストとして紹介しておきたい。\*

\* 2007年7月15日～2008年1月15日の間、国文学研究資料館の招聘を受け、客員准教授として非常に良い環境のなかで研究することができた。この講演はその研究成果の一部である。

### トルコ語に翻訳された日本文学・I（日本語から直接翻訳）

（作家の名字によるアルファベット順）

1. Abe, Kobo, “Kumlarin Kadini”（安部公房『砂の女』；エルキン・H・ジャン翻訳）出版社：Merkez K., 2008, Istanbul.
2. Akutagawa, Ryunosuke, “Kappa”（芥川龍之介『河童』；バイカラ・オウズ翻訳）出版社：Urun Y., 2004, İst.
3. Akutagawa, Ryunosuke, “Orumcek Agi”（『蜘蛛の糸』；アルペル・ヴァネル翻訳）, *Metis Ceviri Sayi*: 12, 出版社：Metis Y., 1990, Ist.
4. Akutagawa, Ryunosuke, “Burun”（『鼻』；エルキン・H・ジャン翻訳）, *Imge Oyokuler Sayi*: 5, 出版社：Imge Y., 2005, Ankara.
5. Dazai, Osamu, “Insanligimi Yitirirken”（太宰治『人間失格』；エルキン・H・ジャン翻訳）出版社：Karakutu Y., 2006, Ist.
6. Kawabata, Yasunari, “Kiraz Cicekleri”（川端康成『古都』；エルキン・H・ジャン翻訳）出版社：Dogan K., 2007, Ist.
7. Natsume, Soseki, “Kucuk Bey”（夏目漱石『坊ちゃん』；エルドアン・所司

- 真理子—オズカヤ・ヒュセイン共訳), 出版社: Oglak Y., 2003, Ist.
8. **Toyama, Atsuko**, “Yuzyilin Donemecinde Turkiye” (遠山敦子『トルコ: 世紀のはざままで』;エルキン・H・ジャン翻訳), 出版社: Turk Japon Vakfi Y., 2004, Ank.
  9. **Murakami, Ryu**, “Seffaf Mavi” (村上龍『限りなく透明に近いブルー』; アルケン・ジーハン翻訳) 出版社: Dogan K., 2007, Ist.
  10. **Murakami, Ryu**, “Yok Yere...” (『イン・ザ・ミソスープ』;エルキン・H・ジャン翻訳) 出版社: Dogan K., 2007, Ist.
  11. **Murakami, Ryu**, “Emanet Dolabi Cocuklari” (『コインロッカー・ベイビーズ』;エルキン・H・ジャン翻訳) 出版社: Dogan K., 2008, Ist.
  12. **Yamamoto, Tsunetomo**, “Hagakure: Sakli Yapraklar” (山本常朝『葉隠』;エルキン・H・ジャン翻訳) 出版社: Is Bankasi Kultur Y., 2006, Ist.
- 

## トルコ語に翻訳された日本文学・II (二次翻訳)

(作家の名字によるアルファベット順)

13. **Derleme**, “Japon Siiri” (『日本詩歌選集』;Sami Akalin翻訳) 出版社: Varlik Y., 1962, Ist.
14. **Abe, Kobo** “Kutu Adam” (安部公房『箱男』;Gurcan, Ahmet 翻訳), 出版社: Remzi K., 1993, Ist.
15. **Akutagawa, Ryunosuke**, “Rashomon” (芥川龍之介『羅生門』;Dursun K., Tarık 翻訳), 出版社: Bilgi Y., 1966, Ankara.
16. **Dazai, Osamu** “Batan Günes” (太宰治『斜陽』;Celikkan Talu, Esin 翻訳) 出版社: YKY, 1994, Ist.
17. **Dazai, Osamu** “Mor Bir Serserinin Gezi Notlari” (『津軽』;Bicen, Asli 翻訳), 出版社: YKY, 2003, Ist.
18. **Ihara, Saikaku**, “Samuraylar Arasinda Ask” (井原西鶴『好色一代男』;Ozguven, Fatih 翻訳), 出版社: Okuyan Us Y., 2004, Ist.
19. **Ihara, Saikaku**, “Aski Seven 5 Kadin” (『好色五人女』;Gokalp, Onur 翻訳), 出版社: Truva Y., 2005, Ist.
20. **Ikezawa, Natsuki**, “Mercan Kemikler Inci Gozler” (池澤夏樹『骨は珊瑚、眼は真珠』;Akgerman, Gonul 翻訳) 出版社: Dogan K., 2002, Ist.
21. **Inoue, Yasusi**, “Askin Uc Yuzu”, (井上靖『死と恋と涙と』;Teksoy, Ayse 翻訳), 出版社: Telos Y., 1996, Ist.
22. **Kawabata, Yasunari**, “Bin Beyaz Turna” (川端康成『千羽鶴』;Selimoglu, Zeyyat 翻訳), 出版社: Cem Y., 1968, Ist. (再版; Arpad, Ahmet 翻訳, 出版社: Dogan K., 2005, Ist.)

23. **Kawabata, Yasunari**, “Kiyoto” (『古都』; Esat Nermi 翻訳), 出版社 : Cem Y., 1968, Ist.
24. **Kawabata, Yasunari**, “Izu Dansozu” (『伊豆の踊子』; Erhat, Azra 翻訳), 出版社 : Cem Y., 1968, Ist.
25. **Kawabata, Yasunari**, “Karlar Ulkesi” (『雪国』; Yeğınobalı Nihal 翻訳). 出版社 : Altın Kitaplar Y., 1968.Ist.
26. **Kawabata, Yasunari**, “Kiraz Cicekleri” (『古都』; Hisarli, Ahmet 翻訳), 出版社 : Altın Kitaplar Y., 1969.Ist.
27. **Kawabata, Yasunari**, “Uykuda Sevilen Kizlar” (『眠れる美女』; Tiryakioglu, Samih 翻訳), 出版社 : Varlık Y., 1971. (再版; 出版社 : Assos Y., 2003, Ist.)
28. **Kawabata, Yasunari**, “Gol : Orman” (『みずうみ』; Gurpınar, Ulkem 翻訳), 出版社 : Can Y., 1992, Ist.
29. **Kawabata, Yasunari**, “Go Ustasi” (『名人』; Disbudak Corakci, Belkis 翻訳), 出版社 : Remzi K., 1992, Ist.
30. **Misima, Yukio**, “Bir Maskenin Itiraflari” (三島由紀夫『仮面の告白』; Selimoglu, Z. 翻訳), 出版社 : Cem Y., 1966, Ist.
31. **Misima, Yukio**, “Dalgaların Sesi” (『潮騒』; Selimoglu, Z. 翻訳), 出版社 : Hurriyet Y., 1972, Ist.
32. **Misima, Yukio**, “Denizi Yitiren Denizci” (『午後の曳航』; Selvi, Seckin 翻訳), 出版社 : Sander Y., 1973, Ist.
33. **Misima, Yukio**, “Solenden Sonra” (『宴の後』; Bozkurt, Bulent 翻訳), 出版社 : Ada Y., 1985, Ist.
34. **Misima, Yukio**, “Yaz Ortasında Olum” (『真夏の死』; Taskin, Gokcin 翻訳), 出版社 : Can Y., 1985, Ist.
35. **Misima, Yukio**, “Altı Çağdaş No Oyunu” (『近代能楽集』; Nermi, Esat 翻訳), 出版社 : Can Y., 1991, Ist.
36. **Misima, Yukio**, “Bereket Denizi 1: Bahar Karları” (『豊饒の海 1 : 春の雪』; Ozgoren, Puren 翻訳), 出版社 : Can Y., 1992, Ist.
37. **Misima, Yukio**, “Bereket Denizi 2: Kacak Atlar” (『豊饒の海 2 : 奔馬』; Ozgoren, P. 翻訳), 出版社 : Can Y., 1993, Ist.
38. **Misima, Yukio**, “Bereket Denizi 3: Safak Tapınagi” (『豊饒の海 3 : 暁の寺』; Ozgoren, P. 翻訳), 出版社 : Can Y., 1994, Ist.
39. **Misima, Yukio**, “Bereket Denizi 4: Melegin Curuyusu” (『豊饒の海 4 : 天人五衰』; Ozgoren, P. 翻訳), 出版社 : Can Y., 1994, Ist.
40. **Murakami, Haruki**, “İmkansizin Sarkisi” (村上春樹『ノルウェイの森』; Onol, Nihal 翻訳), 出版社 : Dogan K., 2004, Ist.

41. **Murakami, Haruki**, “Zemberek Kusunun Guncesi” (『ねじまき鳥クロニクル』; Onol, Nihal 翻訳), 出版社: Dogan K., 2005, Ist.
42. **Murakami, Haruki**, “Sinirin Guneyinde Gunesin Batisinda” (『国境の南、太陽の西』; Polat, Pinar 翻訳), 出版社: Dogan K., 2007, Ist.
43. **Oe, Kenzaburo**, “Kisisel Bir Sorun” (大江健三郎『個人的な体験』; Copurgil, Hepa 翻訳), 出版社: Can Y., 1994, Ist.
44. **Oe, Kenzaburo**, “Kurbanı Beslemek” (『飼育』; Derman, Aykut 翻訳), 出版社: Can Y., 1994, Ist.
45. **Oe, Kenzaburo**, “Gozyaslarımı Sileceğin Gün” (『みずから我が涙をぬぐいたまう日』; Birkan, Ismet 翻訳), 出版社: Can Y., 1994, Ist.
46. **Oe, Kenzaburo**, “Sessiz Ciglik” (『万延元年のフットボール』; Ozdemir, Ilknur 翻訳), 出版社: Altin Kitaplar, Y., 1995, Ist.
47. **Oe, Kenzaburo**, “Delilikten Kurtar Bizi” (『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』; Avunc, Yasar 翻訳), 出版社: Can Y., 1995, Ist.
48. **Ooka, Sohei**, “Ovadaki Atesler” (大岡昇平『野火』; Altan, Ahmet 翻訳), 出版社: Hurriyet Y., 1977, Ist.
49. **Osada, Arata**, “Atom Bombası Çocukları” (長田新『原爆の子』; Bilgi, Alaattin 翻訳), 出版社: Sol Y., 1965, Ankara.
50. **Sei Shonagon**, “Yastikname” (清少納言『枕草子』; Birkan, Tuncay 監修, 翻訳者 83 名), 出版社: Metis Y., 2006, Ist.
51. **Tani, Sinsuke**, “Yesil Muhurlu Mektup”, (谷真介『失われぬ季節』; Yalaza Taluy, Nihal 翻訳), 出版社: Deniz Y., 1977, Ist.
52. **Tanizaki, Junichiro**, “Anahtar” (谷崎潤一郎『鍵』; Hoyi, Ibrahim 翻訳), 出版社: Altin Kitaplar Y., 1968, Ist.
53. **Tanizaki, Junichiro**, “Ve Konyakla Basladı Hersey” (『蓼食う虫』; Kucumen, Zihni 翻訳), 出版社: Kervan Kitapçılık, 1972, Ist.
54. **Tanizaki, Junichiro**, “İhtiyar Cilgin” (『瘋癲老人日記』; Tlabar, Nili 翻訳), 出版社: Can Y., 1982 (2006 年再版), Ist.
55. **Tsuji, Hitonari**, “Beyaz Buddha” (辻仁成『白物』; Yalamanoglu, Serhat 翻訳), 出版社: Dogan K., 2002, Ist.
56. **Yamamoto, Tsunetomo**, “Hagakure:Samurayın El Kitabı” (山本常朝『葉隠』; Tohumcu, Asli 翻訳), 出版社: Ithaki Y., 2005, Ist.
57. **Yosimoto, Banana**, “Mutfak” (よしもとばなな『キッチン』; Durucan, Alev 翻訳), 出版社: Arion Y., 1998, Ist.
58. **Yosimoto, Banana**, “Elveda Tsugumi” (『つぐみ』; Padro, Avi 翻訳), 出版社: Parantez Y., 2004, Ist.